

2020年 か ぜ ひ か

# 風光れ

人権のたより 第26号 9月7日発行

三重県立津東高等学校

こんにちは、人権担当の川邊広美です。

毎日猛暑の中、ふと私が20代のころのことを思い出しました。そのころアレルギーがひどくて、特に夏の時期に首の周りが真っ赤になっていました。それでベビーパウダーで真っ白にして教壇に立っていました。私はそれが恥ずかしくて、カッターの上のボタンを開けていました。首が擦れるし、汗だくでいやでしょうがなかったです。結婚して子どもが三人できましたが、皆アトピーです。なんと子どもの薬で私は治りました。ありがたいことです。当時はなんとか隠そうとしていた自分がいました。



40代になって、生徒たちに授業で「スピーチ」をさせるときに、自分のこの話をしました。「自分をさらけ出すことは勇気がある。でも隠すことは本当の自分じゃない。あのいやな毎日を忘れることはないが今すっかりしている。だから君たちも自分のことをスピーチしてください。」すると生徒たちはそれぞれ、身体的なこととか、いじめに逢ったこととかをスピーチしてくれました。自分を出すことがなによりお互いの理解につながります。

国語の授業を通して、よき学びをさせていただきました。

パラリンピックが本来なら開幕予定だった8月25日、義足の女性たちのファッションショー「切断ヴィーナスショー」がオンラインで開かれました。パラアスリートらが「人は何度でも立ち上がれる」とのメッセージを発信しました。その中に本校卒業生の前川楓さんもいたのです。とても輝かしい姿でした。テレビ等で見た人もいるでしょう。ぜひ来年のパラリンピックでの活躍を期待しています。

またアスリート以外に義足を隠して活動してきたモデルの海音（あまね）さんも笑顔で登場しました。3歳からモデルとして、撮られることが大好きだった彼女。小学6年生の時に患った血管の難病で、引退に追い込まれました。右足は壊死して真っ黒になり、一時は死の淵をさまよいました。中学1年に手術で右足を切断しました。その後も写真に撮られることも避けるようになっていました。「義足は隠すもの」と思っていて、友人には義足を隠し続けていたのです。6年たって、彼女は「義足のモデルになってみたら」と声をかけてもらったのです。憧れの元パラリンピック選手が「勇気を出して自分をさらけ出せば、必ずまっすぐに伝えてくれる人たちがいる」と言葉に残しています。自らをさらけ出すことを決めた海音さんは、将来を見据えて世界でも活躍できるように英語の勉強も始めました。「もっと私を撮られたい」と隠してきた義足でしっかりステージを歩きました。その1歩1歩に感動させられました。



この『風光れ』（2018年第8号12月発行）でも紹介しましたが、熊本に大野勝彦さんがいます。今年亡くなられました（76歳）。その彼が、1989年（平成元年）7



月に農作業中、トラクターの機械により両手を切断。日赤病院に入院しました。彼はその夜にないはずの手の指がかゆくてどうしようもなかったと語ってくれました。子どもたちのためにと夜昼なく働き、子どもたちとともに食事することもなかったそうです。子どもたちが、父親の見舞いの時、病室の前で「えーか絶対に

泣いたらあかん。笑うんや」といって精一杯の笑顔で父に会います。勝彦さんは、子どもたちにこう話しました。「おれは両手がない。今は義手も進歩していて、手首までの長シャツで隠せば義手だと気づかれない。しかし、おれはこの両手を隠さない。退院したら、半袖シャツで熊本の街を歩こうと思う。おまえたちどうや」子どもたちは目にいっぱい涙をためて、「まかしとき、父ちゃん前と後ろでガードしたる」この言葉通り、熊本の街を歩き、義手を隠さず生活してきました。「両手がなくなって、今は家族と食事ができる。倅せいっぱいなんです。」その笑顔が素敵です。ご冥福をお祈りいたします。